

俺はある口、音響装置がらりびり面白げな音を出して居る。

ひんでも増れた時計だらう無くて安物だしを知らなもんなのだが、

俺がそれを手に取り、時計の針を止めた所、無以外の時間が止まったのだ。

俺はその時計を首に取り、手の上で弄びながら歩いているん

買込物を終えた十六夜咲夜が紅魔館へと戻ってしるべの扉を叩いた。

【俺】「時間を止める時計か。あの十六夜咲夜を欺けるが試してみよう」

俺はその考え、咲夜の後を付けて、紅魔館まで付いて来た。



当然の如く尾行は入らずに待ちます。

紅魔館の門の前で、咲夜が待て構えてます。

【咲夜】「貴方のような方が、」

この紅魔館にこの様な用件が来たら、」

【梅】「さ、さー咲夜さまは、どうもなつかしいわー」

【咲夜】「あ、あ、ごめんなさい、ではお返事をします」

咲夜は俺のお世辞も聞き入れず、俺を睨みつけて追返すようにしてる。

俺は服の中に隠した時計を弄して、その針を止める。





「俺」「止まったー咲夜さーん」

咲夜に声をかけても全く反応が無い。

咲夜は時間を止める能力があっても、止められる事には抵抗はできないようだ。

「俺」「大丈夫ですか？ 咲夜さーん」

俺はおそろおそろと咲夜の胸へ両手を伸ばし、触れても時間停止が解除されない事を確認してみた。
ふにふにとした感触がいかにも感觸が手に伝わる。

俺は興奮して、ひとすら咲夜の胸の柔らかさを堪能した。







目の前に現れた少女、これが紅魔館の主であるレミリア・スカーレットだと、俺は直感した。

「レミリア」 「貴方は何者？　なんでこんな所をうろついているのかしら？」

「俺」 「それはですね、咲夜さんにお嬢様を楽しませると頼まれました。」

「レミリア」 「私を？　……たしかに、そういう理由でもなければ、

咲夜が貴方を通すなんてありえないわね」





「レミリア」 「それで、貴方は何をして私を楽しませてくれるのかしら？」

音楽？ 踊り？ 手品？ それとも大道芸？」

「俺」 「手品です。今からお嬢様を気分良くして差し上げます」

「レミリア」 「へえ、私の気分を良くするの？ 面白い、やってみなさい」

レミリアは値踏みするような目で俺を見て笑った。

俺は再び時間を停止させた。





【俺】「それじゃあ早速…マッサージをば…」

俺はレミリアの胸へと手を伸ばした。ふにゆりとした柔らかい感触が伝わる。小さいかと思いきや、この体形にしては結構掴みごたえのある胸をしている。この俺が、こんな体形の美少女の胸を正面から堂々ともんでいる事実。どう見ても犯罪でしかない、ありえないシチュエーションだ。俺はだんだんと興奮を強めていった。





「俺」「さて、邪魔な服は脱がせてしまいましょうね」

俺はレミリアの胸、尻、太ももを服の上から充分に堪能した。

服からは咲夜とは違う、成長していない女の柔らかい匂いが漂ってきた。

一糸まとわぬ吸血鬼の姿は、あまりにもキレイで彫刻のようだった。

興奮ではやる気持ちを押さえ込みながら、ゆっくりと服を脱ぎ、

俺はいきりたつペニスを露出させた。





フラン「あれ？ おじさん誰？」

俺「おじさんはね、お姉さんにお願ひされて、フランちゃんと遊びに来たんだよ」
フラン「お姉さまにお願いされたの？ フラン、そんな話聞いてないよ？」

フランは怪訝な表情で俺を睨みつける。

俺「でも考えてみなよ。お姉さんの許しがないと」

おじさんはここまで入って来れないだろ？」

フランは少し考えた後、納得した様子で俺に向き直り笑顔を向けた。



「フラン」 「それじゃおじさん、フランと何して遊ぶ？」

「俺」 「どう見えて、おじさんは手品師なんだ。」

「フランちゃん」 「フランちゃん気分がよくなる手品をやってあげよう。」

「フラン」 「フランが気持ちよくなっちゃうの？」

「なにそれ、楽しそう！」

姉よりも幼い外見だからか、思考も言動も姉よりも幼い。

こんな少女を今から犯すのかと思うと、ペニスがそそり立っている。

俺は無邪気に笑う少女を尻目に、時間を停止させた。





【俺】「こんな無邪気な女の子を犯すなんて、興奮しちまうなあ。くくく…」

とりあえず俺はフランの服を脱がせていった。
咲夜とは違って小ぶりの胸が、無邪気な顔と小柄な体によく似合う。
そして姉と同じく、人間とは別物のきめ細かい肌が性欲をそそる。

【俺】「そういえば、使っていない玩具が二杯あったなあ！」

俺は挿入の前に、持ってきた淫具を取り出し、フランにあてがった。





【俺】「へへっ…まずはこいつだ」

俺は咲夜に使ったローターを取り出し、フランの割れ目に貼り付ける。スイッチを入れると、ブーンと音を立ててローターが震え始めた。しばらく放置すれば、丁度いい具合に濡れてくれるだろう。

都合の良い事に、止まった時間の中でも、俺の意思で動かす対象を決められるようだ。女の体が反応するのも、ローターが動くのも、この都合の良い能力のおかげだ。男を知らないフランの体が、少しずつほぐれていくのを、俺はじっくりと眺めた。



